

小さな命、小さな光

2014/12/30

3.11以降にたくさんの大切なことに気づきました。
そして、それは3.11以前にも大切なことだったことにも気づきました。
失う前に気づくべきことです。
一人でも多くの人に伝えたいです。
会を作り、ホームページを立ち上げて約1年が経ちました。
この間、いろんなことがありましたが、
多くの方々に支えられ、様々なつながりもできました。
ほんとうに感謝しています。

あの時、流された地域は夜になると街明かりがないので
月や星がきれいでした。
小さいけど、一生懸命輝こうとしている光があることを、
ふだん私たちは気づいていない、
最近そんなことを思います。

命は光です。

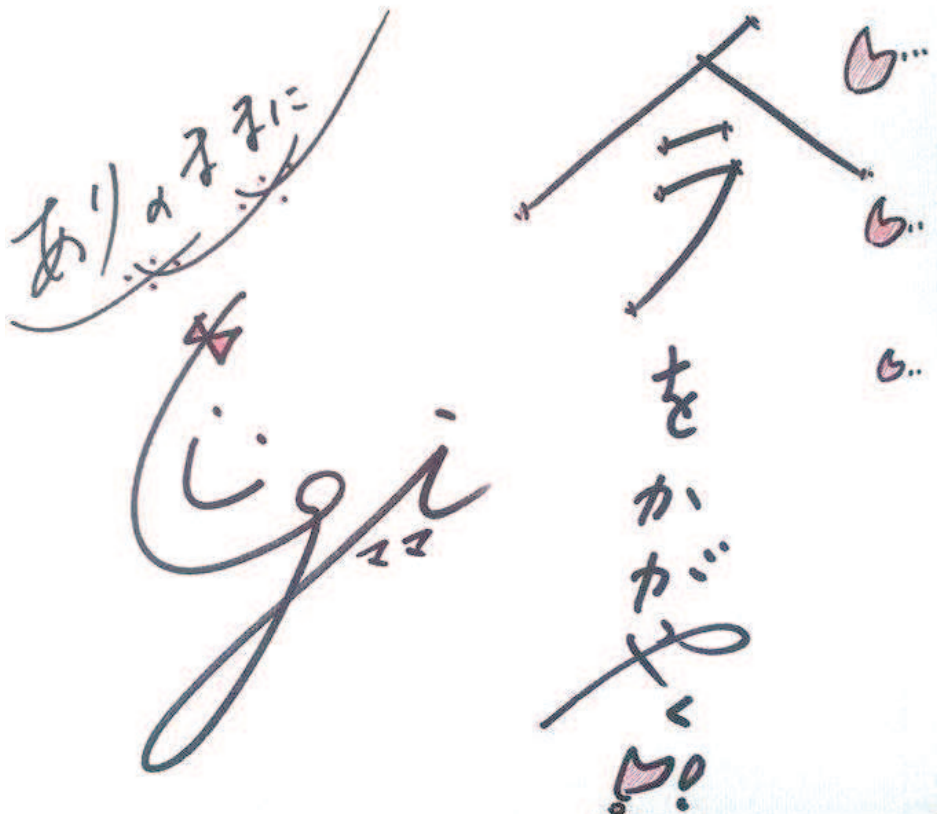


微力ながら、会の活動、応援いたします。

「小さな命の意味を考える」ことが、日本社会全体にとっても必要なことと思います。

いま、世の中の人々は安定と保守を眼前に求めて進んでいますが、より大切なことは、人が幸せに生きる上での基盤を確立しておくことです。安全と安心がない社会では、だれが幸せに生きられるでしょうか。この会は、その入り口を作ってくれと期待しています。頑張ってください。

古賀 正義 中央大学教授



尾木 直樹

教育評論家

LINK

命について考え、守るために活動している
皆さんとの輪が広がっています。

「小さな命の意味を考える会」HPからどうぞ。 http://311chiisanainochi.org/?page_id=769

NPOジェントル ハート プロジェクト

いじめ問題の解決を目指して、いじめ自死遺族等が2003年3月に設立したNPO法人です。

いじめのない社会の実現のため、全国各地での講演会、展示会、勉強会やコンサート等の取組を通して、多くの人たちに「やさしい心」を伝えるための活動を行っています。

学校安全管理と再発防止を考える会

事故調査、原因究明、責任の所在は不明のまま風化されてしまうことで、幼稚園、保育園、学校、教育現場で子供の尊い命が失われているという現状が、残念ながら後を絶ちません。子供たちの命を守れるのは大人たちです。何ができるのか、何が必要なのか、再発防止に向けて事故と真摯に向き合い、未来へつなげていきたいと考えています。

七十七銀行女川支店被災者家族会

2011年3月11日、七十七銀行女川支店行員13人は二階建て支店屋上に避難しました。

約30分後、津波は屋上まで到達し、12人が犠牲になりました。

走れば1分で行けた町の指定避難場所高台があります。なぜ、屋上で待たなければならなかったのでしょうか。企業防災のあるべき方向を考えるサイトです。

浜名湖カッターボート転覆事故を考える

2010年に起きた事故について、真相を追い求めた遺族と支援者の記録。学校の危機管理の問題点を子どもを預かるすべての関係者に認識していただき、二度と学校の危機管理の希薄さによって、子どものいのちが奪われないよう、常に再発防止に向かって努力を重ねることを訴えているサイトです。

あなたをママと呼びたくて…天から舞い降りた命

東日本大震災で犠牲になった石巻の日和幼稚園の園児を主人公にした絵本が出版されました。



3. 1 1 日和幼稚園バス被災 その時何が…

《事故の経緯》

石巻市にある日和幼稚園は、標高56mある日和山の中腹に位置し津波・地震による被害は全くありませんでした。

平成23年3月11日に発生した東日本大震災で、高台にあった日和幼稚園は、巨大な地震を体感しながらも防災無線が鳴るなか、乗せなくていい私達の子供たちまで乗せ、バスを海辺に向けて出発させました。私たちの子供は、本来であれば3便の3時7分発（内陸方面）のバスに乗るはずでした。

この日は、午後2時51分発の（海沿いの地域に住む子供達が乗る）2便目のバスで送迎する事が、朝の時点で既に決まっていたというのです。

地震発生でやむを得ず変更されたのではなく、この様な事が、私達保護者へは一切説明・承諾も得ず、日常的に行われていたという事を、震災後初めて知りました。

揺れが収まり、バスに乗せられていた子供たちは一旦園庭へと避難させられ、子供たちの中には、地震による恐怖などから泣いている子供もいました。園庭には私たちの子供を含め、87人の子供が一時避難していて、その間職員8名の先生方は今後についての行動や役割などの「話し合い」すらせず、又、園長は防災無線を聞いていたにも関わらず、普段と変わる事のない送迎を指示したのです。そして、誰一人としてこの指示をおかしいと思う職員はいませんでした。

午後3時前後には防災無線が鳴り響く中、幼稚園からバスを出発させたのです。高台の幼稚園から低地へと津波の危険が高い海岸付近へとバスは走っていきました。この時、すでに2便目の子供たちの親は、子供たちを迎えに幼稚園へと車を走らせていました。一人の親は偶然にもバスを発見し、クラクションを鳴らし、バスを止め、自分の子供を降ろしてもらい、即座に避難しています。もう一人の親も自宅とは違う場所で、子供を引き取り避難しました。2便目の子供達5人の親は全員、子供を求め幼稚園や門脇小学校にむかった為、誰一人として家にはいませんでした。この様な状況下、バスはいつも通り一軒一軒まわり、最後の家の玄関の前に置手紙が貼られていたそうです。「門脇小学校と日和幼稚園に行ってきます」と。

その置手紙を添乗員が見て、門脇小学校に向かうことになり、小学校に到着すると同時にバスの運転手に幼稚園から電話がありました。運転手が門脇小学校にいる事を伝えると「そこにいてください」と言われ、門脇小学校で待機することになりました。

電話をかけた職員から、バスが門脇小学校にいと園長は聞き、その上で園長は職員2名を門脇小学校に向かわせました。

この時すでに園長は防災無線による大津波警報を知っており、このことを職員に告げずに、ただ「バスを戻せ！」との言葉だけで具体的な目的や指示を出さずに、向かわせたのです。

門脇小学校へは、幼稚園から徒歩数分、子供の足でも3~4分もあればたどりつける階段があります。その階段を使い、門脇小学校の児童をはじめとする多くの近隣住民が避難しました。門脇小学校に向かった職員2名は、その階段を降り、小学校に着き「バスを戻せますか？」と運転手に確認したところ、運転手は「大丈夫です」と答え、再びバスを出発させました。この時、職員2名は、バスの中の子供達の様子を見ることもなく、また、確認や点呼することもなく、バスが門脇小学校を出る事すら見届けないまま、即座に階段を登り、幼稚園へと避難しているのです。

そして、門脇小学校から、再びバスが出発。高台へ続く道が限られていた為、避難しようとしていた車で付近は渋滞しており、その間に津波が押し寄せ、バスが被災しました。これにより、幼稚園バスが津波に巻き込まれ、尊い幼い命が失われました。

バスの被災場所は、あと数メートルで津波被害を逃れられた場所でした。

難を逃れた運転手は、幼稚園に助けを求めに行きましたが、幼稚園が最初に行った行動は運転手の着替えさせ、休ませることで、園長には何も報告しませんでした。

バスの運転手が戻ってきた時点で、子供たちは亡くなったものと扱われ、園長はその後、状況の確認・子供達の捜索すらすることなく、迎えに来た保護者にも本当のことすら告げず事実を隠しました。迎えに来た保護者は、正しい情報を得ることができず、自らの手で子供たちを探すチャンスすら奪われてしまったのです。

しばらくして、現場近くでは火の手があがり、被災現場付近に住む住民の方の証言によると夜中の12時ころまで子供たちの「助けて」との声が聞こえていて、どこにいるのかわからなかった。もし、幼稚園側がバスがそこにあることを教えてくれていれば助けられたかもしれないと話してくれました。3日後、焼けただれたバスのすぐ外で、両腕をあげ、みんなで抱き合うように重なっている子供達を、私たちが発見しました。

《遺族の思い》

私たち遺族は幼稚園にただ当たり前のことを当たり前にしてほしかったのです。

子ども達を落ち着かせ、守り、避難してほしかった。事故を招いた原因は、日頃からのずさんな体制が招いた結果だと私たち遺族は思っております。

子ども達の命を、私たち親はその場に居る先生方に託すしかできないのです。

子どももそれに従う事しかできません。

大人の判断一つで、守れるはずの命も守れない命になることはあってはならないはずです。

私たち遺族は、無理難題を言っているのではありません。津波や火の中に飛び込んでまで助けて欲しいのではなく、ただただそれ以前の行動をとって欲しいのです。

どうかどうか、教育現場や保育現場に居るかたはどんな状況でも「子どもの命を最優先に」ということを強くお願いすると共に、そうあってほしいと願っております。

私たちの子どもたちには沢山の夢と希望がありました。早く自転車の補助輪を取りたい。早くランドセルを背負いたい。幼稚園の先生になりたい。ママみたいになりたい・・・。

これから沢山の事を経験して、みんなと一緒にキラキラと輝いた人生を送るはずでした。

私たち親は叶わなかった夢と希望を一生胸にしまい生きていかななくてはなりません。

最愛の子ども達が命と引き換えに問いかけている防災の在り方について皆様に考え直していただき、子どもたちの命が一番に守られる世の中になってほしいと強く願います。

石巻市日和幼稚園遺族



七十七銀行女川支店 東日本大震災津波問題

私たちは、東日本大震災発生から4年を迎えようとしています。「なぜ、七十七銀行だけが屋上避難なのか？」助かるはずの命だったと今もそう強く思うのです。

2011年3月11日、七十七銀行女川支店行員13人は2階建て支店屋上に逃げました。約30分後、津波は屋上まで到達し、12名が犠牲になり、8人が行方不明のままです。走れば一分で行けた高台、堀切山があったのに。なぜ目の前の高台ではなく、屋上への避難指示が出されたのでしょうか。なぜ、屋上で待たなければならなかったのでしょうか。

あの尋常でないこの世の終わりかと思う長い強い揺れを感じていながら、正面入り口のカギを締め、その場にとどまることは、まるで本店から待機命令が出たかの様に、支店に留まる恐ろしさ、私たちには考えられません。支店は海から100m、屋上の高さ10m、目の前には国費を投下し、作られた標高50mの高台がありました。

銀行は、平成21年に屋上も避難場所に加えたという。しかし行員が持っている災害時連絡カードには「屋上」の記載は無く、「堀切山」としかありません。「屋上」がマニュアルに加わっていなければ、支店長も迷うことなく、「堀切山」といったでしょう。そのプランは宮城県の想定調査の津波高を元にたてられたものだそうです。いったん津波が入り込めば、2倍、3倍とふくらむ、リアス式の津波の特徴、女川の立地条件を踏まえれば、ありえないものです。県の想定調査には、あくまでも想定とされていたものです。

しかも、有事の際には堀切山と屋上を並列とし、防災教育されていない現場の支店長一人に任せきりにしていたと言うのです。支店長に「堀切山」と言わせなかった銀行マニュアル「災害時緊急対応プラン」の罪は、大変、重いのです。取り返しのつかない結果です。

あの時、屋上から更に高さ3mの壁に張り付いた垂直のはしごで搭屋をのぼる行員たちの姿を堀切山から見ていた人、たくさんいます。塔屋の上はフェンスもなく強風が吹けば振り落とされそうな場所でした。あのはしごを想像も絶する恐怖の中よじのぼらなければならなかったスカート姿の女性行員たち、あの寒さの中、最後に上着を脱ぎ捨てた男性行員、計り知れない恐怖、絶望、そして無念さを想像するたび、胸が詰まります。

しかし、銀行側は「やむを得ない」と一言でこの大惨事を自然災害のせいとし、私達遺族に向き合おうとしませんでした。私たちは、七十七銀行に対して職務中の銀行管理下の中、なぜこのような結果にならざるをなかったのか 他の金融機関も避難するまで様々な行動をとったかもしれませんが。でも最終的には避難しています。なぜ、七十七銀行だけなのか、原因究明を追求しています。

企業は、「有事の時の危機管理、危機意識は自ら高めるもの」そうあるべきです。人命を預かる企業の責任として、最悪を想定し、最善の行動をとらなければならなかった。「やむを得ない」とする銀行の見解は企業倫理に欠落するものです。

企業はお客様や従業員の命を預かっているという社会的責任があります。行員家族の幸福も考えなければならぬはずで。亡くなってしまった命にどう向き合うのか、それはお客様に対する向き合い方にも通じるものと思います。

いかなる場合があったにせよ、命を落として良いという理由はありません。想定外の自然災害だったから、仕方がないと言ってしまえば同じ悲劇を繰り返してしまいます。学校管理下や企業に勤める従業員などは、管理下の中にいる以上上司の指示が無い限り勝手な行動を取れるものではありません。リーダーと言われる人の責務は大変大きなものがあります。

今後も東南海地震など大きな地震が来ると想定されています、いつ起きるかわかりません。金品に縛られることのない様な行動、とにかく逃げる、しっかりとした避難訓練、事前の準備が大切です。大きな災害の無い時期を過ごしていると、自分たちの居るところは大丈夫とか、自分たちにはそんなことは起きないだろうと思うことが、大きな危険要因になります。平日頃の心構えが大変大切なことと強く思います。

東日本大震災を教訓に次の災害に活かして欲しい、そして一人の犠牲者も出して欲しくない、悲しむ遺族をもう作って欲しくないのです。東日本大震災を教訓に企業として命をどう守るのか一緒に考えて頂きたいのです。

私たちは、残された家族の使命として、この女川支店行員たちの大切な命を無駄にすることなく「命の大切さ」を全国、全世界の方に伝える活動「語り継ぐ命」を継続していきます。

田村 孝行

七十七銀行女川支店被災者家族会



セウォル号事故遺族の皆様へ

ニュースで、深い悲しみに沈んでいる皆様の様子を知りました。あまりに突然の悲しみと理不尽さに、自ら命を絶つ遺族もおられるという報道に、いたたまれず手紙を書いています。

私の国では、3年前の大津波で、たくさんの命が、木の葉のように流されて消えました。病気とも、戦争とも違います。何の前触れもない死です。

あの年は、毎週のように知人の葬儀があり、泣いて、落ち込んで、悔しがり、気がおかしくなりそうでした。今も、あの人はもういないんだと、ふと思ひ出し、何とも言えず胸が苦しくなります。何の疑問もなく続くと思っていた日常があの日から突然、目の前から消えました。

私の娘は学校で亡くなりました。石巻市立大川小学校の6年生、あと一週間で卒業式でした。学校の前の道路に、泥だらけになった小さな遺体が、次々に並べられていました。とても受け入れることなどできませんでした。今でもそうです。家にいると、娘の「ただいま」が聞こえそうな気がしてなりません。

我が子の名前を呼びながら、海に向かって泣き崩れる方々の映像を見て、とても他人事とは思えませんでした。こんな形で、家族を残して遠くに旅立たなければならないなんて…。怖かったですよ、冷たかったですよ、どんなに生きたかったことですよ。

セウォル号では、危機に対する備えが不十分であったと聞きます。人の命を預かるはずの組織が、命を最優先にしていなかったということです。「命」よりも他のものを優先し、今日もどうせ大丈夫、少しぐらいならいいだろうという積み重ねが、船長をはじめとした乗組員の行動にも表れています。避難マニュアルも、救命ボートも、命を守るためのものではありませんでした。

大川小学校の災害への備えや避難マニュアルも実体のない、杜撰なものであったことが分かっています。そして、保護者や子どもたちが避難を訴えていたにもかかわらず、50分間校庭で動くことはありませんでした。

私は教員です。学校管理下で子どもを亡くした私の職場は、学校です。子どもたちは逃げたくても先生の指示を待っていました。先生の一言で、全員が助かっていたでしょう。体験したことの無い揺れの後、大津波警報が鳴り響いていたあの状況で「逃げろ！」と、なぜ強く言えなかったのか、私はいつも自問しています。

セウォル号の事故で、未だに大川小学校での事故が教訓にもなっていないことが分かりました。3年以上も前の事故を通して、命を預かることの意味が見直されていれば、今回のような事故は防げたかもしれないとさえ思います。船でも列車でも、災害でも、当たり前のことをしていれば、守られるはずの命が失われる事故・事件はけっしてあってはなりません。真に大切なことを、最優先に見つめ、語れる社会にしていかなければと強く思います。

命とはなんとかならないものなのでしょう。地球がちょっと身震いしただけで、破れてしまう薄い紙のようです。一方で、どんな大津波でも流されないものは、心だということを知りました。どんな状況にあっても人は希望を見つけ出せることを知りました。

瓦礫だらけだった町が少しずつ息を吹き返しています。心が折れなければ、希望を持ち続ければ、やがて光は見えてきます。茎が光を目指して伸びていくように。たとえゆっくりでも、たとえ一人でも、それに向かって進めばいいのだと思います。

あの子たちの犠牲が無駄になるかどうか、それが問われているのは生きている私たちです。小さな命たちを未来のために意味のあるものになりたい、それが、三年かかってようやく見つけた私にとってのかすかな光です。

他の国の見知らぬ者が、勝手なことを述べて、嫌な想いをされたのであれば申し訳ありません。関係ないだろう、と言われれば、たしかにそうです。でも、少なくとも私は、こうして書かずにはいられませんでした。皆さんとは、何らかの形で手を携えていけたらとも思っています。

もうすぐ娘の誕生日です。誕生日、お正月、クリスマス…、楽しい思い出の日が今年も巡ってきます。その度、胸を締め付けるこの悲しみは、娘の存在そのものです。だから、無理して乗り越えなくてもいいんだと、最近ようやく気づきました。私は、この悲しみとともに残りの人生を歩んでいきたいと思っています。

時折、夢に出てくる娘はいつも笑顔です。
どうぞご自愛ください。

小さな命の意味を考える会 佐藤 敏郎

한겨레

일본 "쓰나미 참사" 유족이 세월호 참사 유족에게 보내는 편지

한겨레

동일본 대지진 때 활동했던 일본 마해자...

일본 동일본 대지진에서 활동했던 마해자와 세월호 유족에게 편지를 보냈다.

이 편지를 보낸 마해자 모임 '미즈호(水戸) 12'는 2011년 3월 11일 대지진 때 방어진 무리출생학교를 중심으로 활동을 펼쳤다. 최근 위 대지진 쓰나미 피해자들과 무리출생학교를 방문할 때와 대지진 시간이 50년이 지난 후인 학교 벽이 흔들릴 때나 조차물 채우 위해 강수량 10cm를 넘 74명이 출했다. 아이들은 학교 방문으로 유년기의 놀이는 "학교에 여학생은"은 지시를 받고 대지진도 출했다. "가장 중요한 것"은 유년기의 지시를 받다다 목숨을 잃은 세월호의 아이들처럼.

속진 무리출생학교 학생들의 부모들은 지금 행위를 삼다다 소원을 밝히고 있다.

"죽은 생명의 의미를 생각하는 모임"을 꾸린 사람은 <한겨레>에 이 편지를 관동대 세월호 유가족회 편지라고 일하는 소원을 밝혔다.

세월호 사고 교육 기관 방문

뉴스를 통해 많은 슬픔과 화를 느끼는 유년기의 수석은 일제 뒤입니다.

저희 나라(동일본)에서는 3년 전의 대지진 쓰나미로 많은 유년들이 나날을 지내며 슬픔과 화를 느끼고 있습니다. 이런 화기도 많은 유년들이 있습니다. 지금도 '이 세월호 여학생은'이라는 말이 많이 유년들의 학교 활동 때를 만들 기쁨이 유년들이 다. 유년 의심도 많이 느끼는 것이라 유년들이 많이 그날 갑자기 놀았어서 사죄합니다.

저희 유년 학교에서 출생 기쁨입니다. 마해자 모임(미즈호)이 무리출생학교를 방문할 때와 대지진 시간이 50년이 지난 후인 학교 벽이 흔들릴 때나 조차물 채우 위해 강수량 10cm를 넘 74명이 출했다. 아이들은 학교 방문으로 유년기의 놀이는 "학교에 여학생은"은 지시를 받고 대지진도 출했다. "가장 중요한 것"은 유년기의 지시를 받다다 목숨을 잃은 세월호의 아이들처럼.

저는 아이들의 마음을 부끄러워 반감을 받다다 쓰러지는 유년들의 마음을 보고 유년들이 많이 슬픔과 화를 느낍니다. 그런 마음으로 유년들이 유년들이 많이 슬픔과 화를 느낍니다. 유년들이 많이 슬픔과 화를 느낍니다. 유년들이 많이 슬픔과 화를 느낍니다. 유년들이 많이 슬픔과 화를 느낍니다.

大川小学校を遺すことについての意見表明について

■意見表明について～意見表明する6人について～

震災4年目の今年、6人の卒業生が、大川小学校を遺したいという自分の想いを伝える決心をしました。その経緯についてお伝えします。

■こどもの意見表明権～意見を表明することの意義～

学校とは…こどものいのちと権利を守り育むところです。ところが、大川小学校はこどものいのちを守れませんでした。そして大川小学校は、その時、子どもたちは「山に逃げよう」と懸命に訴えたにも関わらず、こどもの意見を聞き入れることもできませんでした。こどもの意見が受け入れられなかったこととなります。子どもたち自身が、気づき・考え・行動を起こそうとしたにもかかわらず、起きた出来事でした。

その後、ご遺族の悲しみに追い打ちをかけるような誠意のない対応に、多くの人たちが心を痛めたままで、いまだにそのダメージから回復できないでいます。その後も、聞き取り調査の記録を破棄してしまったり、子どもたちの証言を「こどもは記憶を間違えてしまうものだ」と言ったりする横柄な態度には、驚かされるばかりでした。子どもたちは、そんな心無い教育者の行いに返す言葉も、反論する機会すらありませんでした。だからこそ、被災した大川小学校を遺すことが大切だと感じた自分たちの思いや願いを意見として伝えることにしたのです。

■これまでの経緯～意見表明までの支援を通して～

2011年の10月から一期目の学習支援に取り組みました。この年の中学3年生たちは、そのほとんどが大川小学校で弟や妹を失っており、家族の悲しみの中で受験に向き合うことになりました。悔しさと、混乱と得体のしれない不安の中で、必死に自分の心を震わせて、歯を食いしばって受験を乗り越えようとする6人のメンタルケアとストレスマネジメントを併せ持った学習支援のプログラムを展開しました。ことば、味覚、自信の回復を図り、何とか全員志望高校合格を手にすることができました。

2012年の10月からは二期目の学習支援、震災当時は中学1年生…切り替えがうまくできずに、自信がなく、学習意欲を回復するまでに、失ったことばと味覚を取り戻すところからの支援を前年にもまして展開しました。この年のキーワードは、「覚悟」と「切り替え」、自分のよさを知り互いに認めあえる関係性の構築からの支援でした。仙台からの中学生も参加しての共同学習を提案しました。さらに、仙台での2泊3日の学習会にも参加し、二期生の4人の仲間は仙台の仲間とともに、この年も全員志望校合格でした。

2013年10月からの三期生たちは、震災当時大川小学校6年生が4人、（生き残った6年生は5人。そのうちの一人は県外に避難）多くの同級生を亡くして、3人の女の子と1人の男の子だけの学年になってしまいました。卒業式も亡くなった同級生とともに卒業したいという願いは退けられ、悔しい想いの卒業式を経験しています。そのダメージは、これまでの受験生として支援してきた子どもたちとは全く違った対応が必要な4人でした。同級生を失い、生き残った自分を責め、心の苦しさや悲しさ、自責の念に苛む日々。はれものに触るような周囲の対応に自己の存在を否定的に捉えて、ただただ生きてきただけの半ば放心状態の4人でした。その実態を受けて我々の支援の在り方をよりていねいに、自己存在感・共感的理解・自己決定をキーワードにサポートを展開しました。その甲斐あって、3期生の3人は、仙台での2泊3日の学習会にも参加するまでに回復し、全員志望校に無事合格しました。



2014年10月からの四期生は2人。大川小学校当時5年生です。毎週週末に追波川仮設住宅の集会所で学習支援を開始しました。4期生の取り組みには、三期生の高校1年生たちが参加し、一緒に学習を始め現在に至っています。ここでのスタイルは、否定しないこと、強制しないこと、ていねいに向き合うことをキーワードに自分のよさを活かした学習支援のプログラムを意識して展開しています。

■校舎を母校としての遺したいという想い

昨年の4月6日に仙台での一期生～四期生の5人による意見表明会をしました。全員に共通して言えることは、「大川小学校にはたくさんのともだちや先生たちとの思い出が残っている」こと、そしてあの場所は「自分たちの心が休まる場所」だということでした。さらには、多くの命が失われた場所だからこそ、二度とそのような悲劇を起こさないための教訓として、広島原爆ドームのように遺せることができたらという想いで意見表明でした。今回もそのために必要な活動の在り方を模索しながら、より多くの方たちへ発信できたらという想いで壇上に上がったということになります。6人がそれぞれに自分のフィルターを通しての想いは変わることなく今回の意見表明に臨みました。昨年の4月以降、月一回仮設住宅の集会所に集まって、意見交換と情報交換を行っています。今課題になっているのは、遺したいという想いを行動に表わすには、署名活動を展開していくことができるかどうかということに今後の方向性を見出そうとしています。

■校舎を震災遺構としての遺すことへの今後の展開

2015年3月14日に仙台で世界防災会議と世界防災ジュニア会議があります。この会議には、これまで活動を続けてきた5人がエントリーしました。ここでは、防災の観点から大川小学校を遺すことの意義を世界に向けて、どう発信できるかが重要になってきます。また、6月には東京での支援コンサートに参加し、その場所で意見表明の機会を提供していただけることになりました。こどもたちの声を聴いて、応援してくださる方たちが増えてきています。そして、次なる行動を起こし始めてくださる方たちが現れるようになってきました。さらに地元では、大川復興協議会にこどもたちの意見を伝えることができました。今後は、署名活動を前提にした意見の表明をどのように展開していくことができるのかを模索していくこととなります。私たちも出来る限り、こどもたちに必要な情報とニーズに応じた支援の在り方をこれまで以上に意識して展開していきたいと考えます。

佐藤 秀明

ここねっと発達支援センター

東日本大震災緊急こどもサポートチーム代表



子どもは地域の宝、地域の未来と言いますが、本当にそうだとしみじみ感じます。校庭から響く子ども達の歓声や歌声、大川小はいつも、地域と共にありました。私も卒業生（当時は大川第一小学校）として、PTAの一員として、地域社会の一員として深く関わってきました。思い出も数多くあり、大川小の犠牲については、残念でなりません。

あの事故にしっかり向き合おうという、小さな命の意味を考える会の活動に「異議なし」です。地域はもちろん、多くの方々にバックアップしていただければと思います。また、ふんばろう東日本プロジェクトの皆様には、この4年間、様々な支援をいただきました。この場を借りて感謝申し上げます。

浜畑 幹夫
大川地区復興協議会 事務局長

大川の記憶 2014/8/11

今日はシンサイミライ学校という交流学习に参加し
県内外の中学、高校、大学生と一緒に
長面地区と大川小学校に行きました

長面（ながつら：大川地区の東、海に面した地区）は
何もかもなくなっていました

長面はお祭りが賑やかで、
娘が6年生のときにせがまれて一緒に行きました
震災前に長面に行ったのはそれが最後

初めてここに立ったような
そんな錯覚に陥り
案内をするはずが
しばらく言葉が出ませんでした
地盤沈下で至る所が冠水し
どこに何があったのか思い出せなかったからです

夏休み
自転車を走らせた海水浴場に続く道も
同級生の家や
店も、体育館も、電信柱も
何もない
瓦礫さえもない
やがて誰も知らなくなるのだろうか
ここに町並みがあったなんて

「記憶の中にしかない」風景だけど
「記憶の中にさえない」風景にしたくない
だから語り、伝えていく

ここにたしかにあった建物、営み、命…
必死に思い出しながら
話しました
若者達は真剣に聞いてくれました
今日で3年5ヶ月です

